

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 5日現在

機関番号：13902

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653099

研究課題名（和文） 多文化対応型社会科教材の開発

研究課題名（英文） The social studies teaching materials for multicultural societies

研究代表者 土屋 武志

(TSUCHIYA TAKESHI)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20273302

研究成果の概要（和文）：本研究は、一人の個人がいくつかの市民権を持ち、国家のみから与えられる権利だけではないという Multiple Citizenship の視点にたち、立場の違ういくつかの「情報」に向き合う社会科教材事例を分析し、外国籍市民が増加している地域の学校において、市民社会の多重性・多文化性を前提にした教育活動とそのため教材開発理論を明確化した。特に多文化社会に対応した歴史学習として「解釈型歴史学習」が有効であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：I stood in the viewpoint of "Multiple Citizenship" that one individual had some citizenship, and this study analyzed the social studies teaching materials which utilized a lot of information, and, as a result, this study clarified the theory on modernization of the teaching materials which brought up a multidirectional viewpoint assuming the multiculturalism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	0	700,000
2010年度	800,000	0	800,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	240,000	2,540,000

研究分野：人文・社会

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：多文化共生・社会科教育・歴史教育・解釈型歴史学習

1. 研究開始当初の背景

200万人を超える外国籍市民の増加という社会背景の中で、学校教育における多文化化に対応する教材開発が求められた。

2. 研究の目的

社会科教育における多文化対応型教材の開発理論を明確化することにより、学校における多文化化に対応した教育を進める基盤を整備するとともに、グローバル化の進展と

ともに同様な問題も持つアジア地域に教育モデルを提供する

3. 研究の方法

多文化化が進むヨーロッパの歴史教材を分析するとともに、アジア地域の多文化社会モデルとしてインドネシアの歴史教育研究者と研究交流を図る。

4. 研究成果

ヨーロッパ型の解釈型歴史学習が、多文化

社会に有効なこと。この学習が、学習者を歴史家の立場に立たせる歴史家体験活動に基づくこと。それが、具体的には、複数の立場から情報を活用する教材によって進められること。それがアジア地域でも今後重要な学習方法となることを明確にした。

(1) 歴史家体験活動としての解釈型歴史学習

解釈型歴史学習は、見出しに沿って文章を書く活動や多くの具体的な事実を示して論述する活動、図表にして示す活動など、「書く活動」を通して思考を深める学習であることが特色である。

また、解釈型歴史学習では、資料・情報を評価し、解釈の根拠を示す活動が学習者に繰り返され続けている。それは、複数の歴史解釈を批判的に検証する過程を重視し、生徒の主眼的歴史認識を形成するという点で、児玉康弘の「解釈批判学習」と同じ立場をとっていると考えられる。解釈型歴史学習は、歴史を「解釈」する能力を育てることを第一に重視する。それは、資料批判（資料評価）を経て情報を組み立てて論述するという歴史家の疑似体験として進められる。

(2) 解釈型歴史学習における対話活動

民主社会における教育は、「民主主義は大切である」という認識を育て、その考えにもとづいて民主的に行動する市民を育てる役割がある。その基本的手段は「討論」である。民主主義は、多くの人々が話し合って解決策を見つける。学習者たちが討論をするためには、違う立場の違う意見（＝仮説）があることが必要である。そのために、教師が違う意見を大切にする必要がある。教師は、子どもが少数意見を言うことへの心理的プレッシャーを低くする授業を工夫する。

たとえば、最初は、隣どうしのペアや4人程のグループの中で意見を順に言うなどの方法である。次にペアの中の一人が全員の前で発表する。そのときもう一人はサポートする意見を付け加えるなどの授業方法が効果がある。グループを代表して発表する場合は、発表者を支えるサポーターとなる子どもをつくり、グループを代表して意見を述べた子どもの後に他の子どもが補足意見や解説を述べる機会を与えるなどである。また、あえて、ユニークなつまり他の人が考えないようなことを言ってくださいという指示も効果がある。自分たちのグループだけの発見や仮説をつくるのが、その後の学習活動に主体性を持たせる。

このような活動の際、子どもたちの意見について、教師が良いとか悪いという判断をしないことは重要である。その意見が良いか悪いかは、子どもたち自身が討論によって判断する。もし、前もって教師がそれを良いと判

断した場合、異なる意見を持っている子どもは、自分の意見を言うことができなくなる。したがって、教師は、たとえ正しい意見（仮説）が発表されたとしても「いまの意見はどうですか？」とそれとは別の意見の発表を促す指示をすべきである。特に少数意見（仮説）について、教師がそれを無視したりだめだと単純に否定しない。

一方、子どもが自分の意見（仮説）について理由や根拠を示すことは、論理的な「対話」の基本である。感情的対立を避けるため、根拠を示さない意見に対して、教師は、「もう一度言ってください。」あるいは「理由を言ってください。」と助言する。それは、子どもに根拠をつけて意見をいう論理的能力を育てるためである。子どもは、意見の「根拠」として適切なデータを用いる。地図や統計資料、教科書などが根拠であるが、必要な場合は社会科見学や休日の課題の形で子ども自身によるフィールドワークも実施する。教科書以外に新聞記事や本なども資料として利用できる。それを教師が子どもに与えるのではなく、気づくようなところに置いていたり掲示しておく。以上のことは、歴史学習が市民的資質を育成する社会科として実践される以上、もっとも重視すべき学習活動である。このような学習活動を前提として、教材をつくる。

(3) EUにおける歴史教材開発原理

EU 地域を中心に歴史教師の研修と教材開発に取り組む民間組織ユーロクリオ（Euroclio）は、教師が生徒に「教師や教科書にも批判的」であるよう教えることが重要だという。ユーロクリオは、歴史学習に次のような基本要素を設定している。

- ・史実に対して批判的態度をとる。
- ・歴史家や歴史教科書の著者、ジャーナリスト、テレビ番組のプロデューサーが単に事実を報じているのではなく、入手可能な情報を解釈したり、出来事や成り行きを理解し説明するための異なる諸事実の間で関係をみようとしていたりしていることを理解する。
- ・この過程をとおして、彼らが選んだ事実を証拠事実（つまり、何が起こったのかについて、ある特定の議論や解釈を支えるために利用される事実）へと変えているということを理解する。
- ・いかなる歴史的イベントやその進展にも視点の多様性があると認識する。
- ・歴史認識と歴史解釈に必要な不可欠な考え方を育てる。

このような基本要素を持つ歴史学習によって、生徒は、歴史には「異なる証人の目」や「異なる国、異なる解釈から見えた出来事」が含まれることなどを学ぶことになるのだという。つまり、歴史学習の基本的内容は、

歴史を所与の「絶対的な真実」と見なすのではなく、人が「選んだ」情報から組み立てられた「解釈」であることを理解することだと考えられている。そのため、それを模倣的に体験させる歴史家体験活動が重視される。

(4)歴史学習における評価

イギリスの場合、中等教育段階では、歴史解釈にかかわって、次のような評価基準がある(一部抜粋、下線土屋)。

レベル 3 過去を解釈するとき、異なる方法があることを確認する。

レベル 5 過去の異なる解釈についていくつかの理由を提案する。彼らは、なぜいくつかの出来事や人々や変化が他より歴史的に重要であると判断されたか理解し始める。

レベル 8 一連の歴史解釈と歴史的 중요性に関する異なる判断を分析し、説明する。歴史の問題と文献を調査し探求活動を提案する。そして、研究方法を

改善する。彼らは批判的に一連の資料を評価し、自ら立証した結論に達する。これらは解釈にかかわる部分を抜き出したものである。全部で9段階ある基準のうち、レベル8は、高い目標値であるが、高校レベルでの達成が期待される基準である。少なくとも多数の生徒がレベル5に到達することが期待されている。レベル8に到達する場合、自らの立証について、批判的な資料評価過程が必要とされる。

(5)東アジア地域における解釈型歴史学習の今日的役割

解釈型歴史学習は、過去の社会を異文化としてとらえ、残された情報から歴史を「解釈」し「復元」し「描き出」していく活動である。このとき、一つの市民権つまり一つの立場からだけで組み立てる歴史は、多重市民権社会では他の市民権との共通点を見出しにくくなる。そのため、すべての市民(国民)が、歴史をめぐる国家間対立に巻き込まれることさえ起こりうる。解釈型歴史学習は、歴史がそのように用いられることを防ぎ、「歴史」自体が持つ曖昧さや危険性に気づかせ、異なる複数の歴史観に対して許容力を持つ市民を育成するために効果的であると考えられる。

解釈型歴史学習は、生徒自身の視点を保障する学習であるため、たとえ教科書が国家史で構成されたものであっても、その制約を越えて歴史を考えることができる。このことは、学習内容が異なっている国家間の歴史教育に共通のチャンネルを開くことにもなる。つまり、学習内容が対立する教科書も教材として活用できるということである。本研究では、唯一絶対の正しい教科書(正史)を教えるという発想ではなく、歴史には複数の視点が存

在し、対立する場合もあることを教えることや、その対立がその人々のよって立つ市民性(立場)の違いから生じることを教えることの方が、現実的な歴史教育であることが明らかになった。そして、歴史学習活動の中に、この点を意図的に取り入れ、「対話」を重視することによって、東アジア共通の社会科学習活動を開発することができると考える。東アジアの政府間にある歴史認識の違いは、市民相互の関わり合いの中で平和的に解決の方向性を見つけるしか根本的な解決はできない。歴史の見方の違いをそれぞれが確認し、理解する。その際、唯一の市民権ではなく、自分自身の中にもいくつかの立場(国民、〇〇市民、地球人、〇〇学校の生徒など)があること、いずれかの市民権の視点を優先させることによって、対立ではなく相互の協働が可能なことなどを学ばせる。そのための学習方法として、解釈型歴史学習は有効である。つまり、文化的背景、国籍も違う多様な現代の「市民」に一つの「正統な」歴史解釈ではなく、多様な解釈を保障すること。これが今日の歴史学習に課せられている。多様な国家同士で今後も相互に協力しなければならない東アジアにおいて、この視点、つまり「多様性の保障」という視点から、解釈型歴史学習は多様性を前提とした新しい市民社会(国家)形成に大きな可能性を持つ。

(6)多文化対応型歴史教材開発の基本視点

本研究で示した、教材開発の視点(問い)の一部を以下に示す。

① 生徒の関心や意欲を高める活動＝「なぞ」を探し出したり、気づきや発見を引き出し、それを整理させることによって「関心・意欲」を高める活動(問いかけ)。

a なぞを発見する活動

・この資料の中でいちばん不思議な場面はどこですか？
・この資料の中でもっともなぞの人物は誰ですか？・この資料の中の世界ではどんな声や音がきこえるでしょうか？

b なぞを深める活動

・あなたが見つけた不思議な場面は何をしているところだと思いますか？
・なぞの人物の服装や様子は他の人と違いますか？
・どんな声や音がきこえるかノートに書き出してみよう。
・なぜそれが「なぞ」なのかその理由を整理して、「なぞ」を深めよう。

② 思考・判断の力を高める活動＝過去と現代を比較させたり、ランキングさせ、それらを表現させることによって思考力を高める活動。

a 現代と比較する活動

・この資料の中でいまと最も違うところほど

こでしょう？

- ・この資料の場面にタイムトラベルしたら、あなたはの中の誰に何を聞きますか？
- ・この資料の場面（もしくは時代）から現代に一つだけ持ち帰ることを許されたら何を選びますか？

b 順位付けの活動

- ・あなたの考え（予想）のなかで、最も重視する考えは何ですか？
- ・その理由のうち何が最も重要な理由ですか？

c 他の人にわかりやすく表現する活動

- ・テーマを考えて資料の中に描かれている人物にセリフをつけてみよう。（ある事件についてなど具体的にテーマを指示してもよい）
- ・タイムトラベラーとして見出しを考え、この資料の様子をいまの人に伝える新聞記事を書いてみよう。
- ・歴史家として、タイムスリップしたとき、この資料の時代のこの場所からテレビ中継をしたらどんな報告やコメントをしますか。1分間スピーチをやってみよう。

③ 資料活用技能を高める活動＝資料を観察し、必要な情報を読み取らせたり、分類・整理させる活動

a 特徴を発見する活動

- ・この資料の中で前に学習した時代と似たところはどこですか？
- ・この資料の中に教科書〇〇ページにある資料と似た人物やモノをさがそう？
- ・この資料の場面にタイムスリップしたらどんな臭いや音がするでしょう？資料の中からその理由をさがそう。

b 分類する活動

- ・この資料の中の場面进行分类してみよう。
- ・この資料の中で立場の違う人たちが描かれているとすればいくつの立場がありますか？
- ・この資料の中から次のことを考えるヒントをさがそう（重複しても良いいくつでも良い）。たとえば、この時代の食料事情・エネルギー・医療や衛生 状況・運搬や流通・商業・身分やしきたり・国際関係・学問や教育・娯楽・信仰や宗教・描かれている季節などから複数選ぶ。

④ 知識・理解を確実にする活動＝歴史用語を正確に用いて現代とは違った過去の社会を理解する活動。

a キーワードを使う活動

- ・この資料の中の人やモノに歴史的な用語を記入してみよう。
- ・歴史用語を使って、この資料の簡単な説明を書き、伝言ゲームをしよう。
- ・この資料にタイトルを付け、そのタイトルに即してこの時代を説明しよう（教科書にある事件や人物など具体的な例を用いて説明する）。

b 当時の社会的立場に立って説明する活動

- ・この資料の中の誰かの立場に立って、その人物に代わって現代の人々に手紙を書こう。そのさい、その人物がそのように話す理由を考えてあなた自身の解説を付け加えよう。
- ・この資料の中のある人物にこの場所を案内してもらったら、その人はどんな説明をするでしょうか。立場の違う人物を何人か選んで、それぞれの立場から案内のセリフを書いてみよう。
- ・現代のあなたの視点でこの資料を見たとき、最も大きな社会問題と考えられる場面はどの場面ですか。当時それが解決されなかった理由を説明しよう。

以上の①～④の活動は、教材(資料)を一つの情報源として、そこから情報を読み取り解釈する活動である。この活動によって現代の特徴が理解できる。たとえば、過去の身分の差を学習すると現代の平等な社会の特徴がよくわかる。民主的な社会関係の特徴を理解するため、現代と違う過去の思考や常識に気づかせる活動は重要である。教材は、このような活動を前提として開発・活用するのである。

本研究では、特に社会科歴史学習を中心に研究したが、歴史学習が、社会科として位置付くために、解釈型歴史学習という学習方法とそれに即した教材開発が重要であることが明らかとなった。このことは、正しい歴史解釈を与えるという発想から進められてきた従来の日本の歴史教育研究に、それとはまったく異なる新たな視点を明確化したと同時に、日本と同様の課題を有する東アジア地域の社会科歴史教育に新たな示唆を与えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

(1) 土屋武志, 高校日本史学習における読解力の育成—「歴史家体験」活動—, 日本教育大学協会研究年報, 査読有, 第30集, 2012, 3-13

(2) 土屋武志, 社会科における解釈型歴史学習の現代的意義, 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 査読有, 第61輯, 2012, 183-189, <http://repository.aichi-edu.ac.jp/dspace/>

(3) 土屋武志, 解釈型歴史学習の方法的特色: 「読解力」育成の視点から, Korean Journal of the Japan Education, 査読有, Vol16 No.2, 2012, 161-174

(4) 土屋武志, 多文化社会における解釈型歴史学習の役割, 歴史研究, 査読無, 第 57 号, 2011, 1-16

〔学会発表〕 (計 1 件)

(1) 土屋武志, 解釈型歴史学習における歴史科体験, 日本社会科教育学会 61 回全国大会, 2011 年 10 月 23 日, 北海道教育大学

〔図書〕 (計 1 件)

(1) 土屋武志, 解釈型歴史学習のすすめ-対話を重視した社会科歴史-, 梓出版社, 2011, 171 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土屋 武志 (TSUCHIYA TAKESHI)
愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号 : 20273302

(2) 研究分担者

無

(3) 連携研究者

無